世界名作劇場

小公女（プリンセス）セーラ

『新学期のいじわる』

第 33 話

提供　ハウス食品工業

制作　日本アニメーション
　　　フジテレビ

脚本　中西隆三

登場キャラクター（第三十三話「新学期のいじわる」）

セーラ・クルー
ミンチン院長
アメリア先生
ベッキー
ピーター
モーリー
ジェームス
アーメンガード
ロッティ
ラビニア

ジェシー
ガートルード
ドナルド
ラビニアの母
ピーターの友達

〇

エミリー（人形）
シーザー（猫）
メルの一家（ネズミ）

1

ミンチン女学院・台所（朝）

ミンチン女学院・台所（朝）もうもうと昇る大鍋の湯気。
大汗で働くジェームスの傍で——忙しく食器を整え、
野菜を準備するセーラとベッキー。
モリーが、せかせかと入って来る——

モリー「さあさあ、今日から生徒さんたちが戻って来るんだからね。
夏休み気分でモタモタしてると、院長先生にドヤされるよ！」
セーラ「はい、モリーさん……」
ジェームス「気をつけろよ。生徒の親が来るって事になると、院長先生はピリピリだからな」
セーラ「はい、ジェームスさん……」

その時、階上からミンチンの呼ぶ声——

ミンチンの声「セーラ！……ベッキー！」
セーラ「は、はーい、院長先生……！」

ジェームス「そおら、おいでなすった」
セーラとベッキー、モリーとジェームスの笑いを背に、
急いで出て行く――

2

同・一階廊下

院長室前に、威丈高に立つミンチンと、前にセーラ、ベッキー――

ミンチン「いいですね。間もなく、親御さん方が生徒たちを送って見えます。掃除その他に抜かりはないですね?!」

セーラ「はい、院長先生……」

ミンチン「点検します! 来るんです!」
ミンチン、教室の方へ―― セーラとベッキー、急いで続く。

3

同・教　室

入って来るミンチンと、続くセーラ、ベッキー——ミンチン、教卓をスッと指でなでて確かめ、辺りを見廻す。

ふと窓に気づく。

ミンチン「な、なんです、あの窓の汚れは？」

セーラとベッキー、はっと見る。

ベッキー、突然笑い出す——

ベッキー「院、院長先生！……あれはホレ、雀の、ソソウでございます」

ミンチン「ソソウ……？」

見ると、窓外に飛び交う雀たちの群——

ミンチン「（ジロリ）な、なにがおかしいんです！……磨いておきなさい！」

ベッキー「（ビクッ）は、はい、ただいま！」

4

同・三階廊下

眠っていたシーザーが、眼をさまして大きく伸びをする
――
階段の手摺りを、フッフッと吹いてみながら、ミンチンがセーラを連れて上って来る――

5

同・ラビニアの部屋

ミンチン、セーラと入って来ると見廻す。

ミンチン「ラビニアさんのお母様は、仲々やかましい方ですから、そのつもりで」

セーラ「はい、院長先生……」

ミンチン、窓枠をなぞり、暖炉の上を吹いてみる――

その時、開いた儘のドアから、アメリアが入って来る。

アメリア「あ、お姉様……！」

ミンチン「どうしたんです、アメリア」

アメリア「あの……お姉様に、ラビニアさんをお迎えに行くように云われていたんですけど、まだ、新学期の準備の方が終らなくて……」

ミンチン「まあ、なんてノロマなんです！」

アメリア「す、すみません……それで、代りに、セーラさんに行って貰っては、いけないでしょうか」

ミンチン「なんですって？」

アメリア「セーラさんなら、インドから着いた時、港の様子は見て知っている筈ですし……」

ミンチン「呆れた……ま、仕方がないでしょう」

ジロリとセーラを見て冷笑する——

ミンチン「ひょっとすると、先様もお前が迎えに出た方が、喜ぶかも

知れないからね」

アメリア「お、お姉様……」

ミンチン、すっと出て行く――

茫然と見送って立尽すセーラ――

6 同・表

使用人階段を上って来るセーラ、ふと立停る――

7 フラッシュ（22話より）

特別室で――　ラビニアと母たち。

母親「確か、セーラとか申しましたわね。あの子を娘の専用メイドに廻して頂く訳には参りませんでしょうか」

ラビニア、冷笑――

セーラ「お引受け……致します……もし、ラビニアさんが、以前のクラスメートを御親切にも専属メイドにしたいと考えているのでしたら……」

×　　×　　×

8　ミンチン女学院・表

ふっと吐息したセーラ、通りへ歩き出す。

×　　×　　×

その背後に現われて、そっと見送るベッキー——

9　ロンドン港・全景

——輻湊する船、船、船。

——汽笛が響き渡る。

10

同・波止場の一角

雑踏を――探しながら来るセーラ。

突然、横合いから駆けて来た幼い男の子が、セーラと突き当る。

セーラ「あッ……」

男の子「ご、ごめんなさい！」

セーラを見て驚いた男の子は、ドナルド。

ドナルド「あれェ？　また君に逢っちゃったね」

セーラ「まあ、あなただったの……こんな所へ一人で？」

ドナルド「違うよ。ぼく、パパを送りに来たんだ」

セーラ「お父様を？」

ドナルド「ほら、あそこに、お姉さんやママと一緒にいるでしょ？」

ドナルド、一方を指す――

×　×　×

離れて――停っている馬車の脇で、ジャネットや夫人に挾まれて、スーツケースを降しているカーマイケルの姿。

× × ×

ドナルド「ほら、ぼく、この間、パパの知ってる人の家に、お見舞に行くと云ったでしょ?」

セーラ「ええ……」

ドナルド「パパはね、その人に頼まれて、パリまで人を探しに行くんだよ」

セーラ「まあ、パリへ?」

ドナルド「うん……パパの話だと、その人のお友だちが亡くなって、たった一人のお嬢さんの行方が判らないんだって……それで顧問弁護士のパパが代りに探しに行くのさ」

セーラ「そお……大変なのねえ」

ドナルド「君、パパやママは?」

セーラ「（淋しく微笑で首を振る）亡くなったわ、二人とも……」
ドナルド「そおかあ……可哀想な人って、どこにも沢山いるんだね……あ、ぼく、もう行かなくちゃ……じゃ、またね」
セーラ「あ、気をつけて！」
ドナルド、カーマイケルの方へ走り去る。
ほっと見送るセーラ――

× × ×

離れて――カーマイケルたちの所へ駆け戻るドナルド。
――汽笛が鳴る。
カーマイケル、ドナルドとジャネットの頭をなでると、夫人と別れを告げ、スーツケースを提げて――岸壁の客船のタラップの方へ向う。
見送るドナルド一家の姿――

× × ×

その姿を――微笑でじっと見守って立つセーラ。

声　「まあ、セーラじゃないの！」

突然、一方から――

セーラ、はっと振返る――

×　　　×　　　×

逆方向の雑踏から――着飾った旅装のラビニアと母親が、大型鞄を持たせたポーター達を引き連れて近づいて来る。

×　　　×　　　×

セーラ「まあ……ラビニア……お帰りなさい」

ラビニアたち、近づく――

母親「（笑顔）まあまあ、あなたまで、お迎え御苦労様……アメリア先生は？」

セーラ「それが、新学期の準備があって、代りに私が」

母親「ンまあ、なんてことでしょう！……あれ程アメリア先生にお願いしておいたのに」

ふとセーラに微笑する——
母　親「でもまあ、あなたが来て下さればね、ねえ、ラビニア」
ラビニア「（冷笑）荷物が多いのよ。大きな馬車を呼んで来て頂戴！」
セーラ「はい、判りました……」
セーラ、去る——鼻をうごめかせて見送るラビニアと、母親。

11　ミンチン女学院・全景

停っていた二台程の馬車がゆっくりと走り出すのが見え、二階の窓から手を振る生徒たちの声が聞える——
「さよなら、ママ！」「バイバイ、パパ」
×　　×　　×
そこへまた一台、大型鞄を積んだ馬車が停り、セーラが降りる——続いて、メイドに対する高慢さで降り立つ

ラビニアと母親。

12 同・二階廊下

階段を――大型鞄を担いで上って来るジェームスとモリー、三階へ。
続いてミンチンとアメリアに挟まれて上機嫌のラビニアと母親が上って来る。

母　親「なにしろ、院長先生、娘には初めてのヨーロッパ旅行ざんしょ。夏休みが短かすぎて短かすぎて、ホッホッホッホ」

ミンチン「まあまあ、それは大変でございましたこと、さ、さ、どうぞ」

三人は三階へ――ラビニアは立停って待つ。下からラビニアのスーツケースを提げたセーラが重そうに上って来る。

ラビニア「早くしなさいよ！」

その時、女生徒たちの部屋から飛び出して来るロッティ、
アーメンガード以下の女生徒たち――

ロッティ「セーラ・ママ！」

アーメンガード「ただいま、セーラ！」

一斉にセーラを取囲む――

セーラ「まあ、お帰りなさい。ロッティ、アーメンガード。みなさんも元気だった？」

アーメンガード「ええ、この通りよ……でも、また太っちゃったの……」

泣顔に、どっと笑う一同――

ロッティ「ね、セーラ・ママ、私、大きくなった？」

セーラ「ええ、とても大きくなったみたいよ」

ロッティ「うわあい！」

笑うラビニアと女生徒たち――

× × ×

その囲みから取り残されて、怒りに震えるラビニア——
その傍に、遅れて部屋から出て来たジェシーとガートルード。
ラビニア「いい加減にしてよ！」
×　　×　　×
はっと振返るセーラと、アーメンガード、
ロッティ以下の女生徒たち——
×　　×　　×
ラビニア「さ、セーラ……運ぶのよ、私の荷物」
三階への階段へ促す——
×　　×　　×
セーラ、見返したが、そっとスーツケースを持ち直すと、
ラビニアに続いて、重そうに運び上げて行く——
その姿を心配気に見送って顔を見合すアーメンガード、
ロッティたち——

ジェシーとガートルードは、ニヤリと肩をすくめ合う——

13 同・ラビニアの部屋

入って来るラビニアと、スーツケースを提げたセーラー——

奥の部屋から、ミンチン、アメリアと出て来るラビニアの母——続いてモリーとジェームス。

母親「そうなんざますのよ。うちの主人も、この学院にはもっと寄附をしたいなんて申しておりましてね、ホホホ」

ミンチン「まあ、有難う存じますわ、奥様」

ニコニコ頷くアメリア——

母親、ラビニアに気づく——

母親「あ、ラビニア……それじゃ、ママはサボイ・ホテルに泊りま

すから、アメリカに帰る前に遊びに来るようにね」
ツンと頷くラビニア——
母　親「では、院長先生、今後ともよろしくお願い致しますわ」
ミンチン「いいえ、こちらこそ奥様……」
母親を送って出て行くミンチンとアメリア——見送ったラビニア、セーラを見る。
ラビニア「フフ、私ね、あなたに逢えるのがずっと楽しみだったの。退屈なヨーロッパ旅行よりもね……なぜだか判る？……それはね……あなたが憎たらしいからよ！」
蒼然と見返すセーラ——

（中　C　M）

14 同・地下の作業室

テーブルに、生徒たちの帰郷時の外出靴の山――セーラがそのひとつを懸命に磨いている。
――聞えて来る振鈴の音。
セーラ、ふっと顔をあげ、微笑で呟く。

セーラ「新学期の授業が始まるんだわ」

その時、突然泣顔で駆け込んで来るベッキー。

ベッキー「お、お嬢様……」

セーラ「どうしたの、ベッキー」

ベッキー「ラ、ラビニアさんが、お掃除が気に入らないから、お嬢様を呼べって……」

セーラ「え……」

ベッキー「なんだか、凄く怒ってるんです」

セーラ「行ってみるわ」

セーラ、靴を置き、急いで出て行く。

ベッキー「あ、お嬢様……」

ベッキー、慌てて追う――

15

同・教室

ドアが開き、そっと入るセーラと、恐る恐る続くベッキー――

×　　　×　　　×

席についていた女生徒たちが、一斉に顔を向け、前の席に、集って立っていたラビニア、ジェシー、ガートルードが、ジロリと振返る――

ラビニア「遅かったわね」

セーラ、途惑って近づく。

セーラ「あの、なにか気に入らない事があったとか」

ラビニア「これよ！」
手にした石版を突き出す――
ラビニア「これでもちゃんと掃除したと云えるの」
セーラ「ええ、勿論、きれいに拭いた筈よ」
ラビニア「見なさいよ！……夏休み中に、誰かが私の石版使ったのよ！」
はっとなるベッキー、思わず出る。
ベッキー「あの……使ったとしたら、私です」
ラビニア「なんですって？」
セーラ「ベッキー……！」
ベッキー「いいえ、お嬢様……私、字を憶えたくて、夏休みに、確かにこの教室に入って、石版をお借りした事があるんです」
セーラ「まあ……」
ベッキー「申訳けありません」
ラビニア「やめてよ！……あんたにあやまって貰っても仕様がないわ。

私は、セーラに云ってるんだから」

セーラ、凝然と見返す――

ラビニア「なによ、その顔は……私に逆うのね！」

いきなりラビニア、手にした石版でセーラの顔を殴ろうとする――咄嗟に手で払うセーラ。瞬間、ラビニアの手から飛んだ石版が、窓ガラスにぶつかり、激しい音と共に一枚が割れ落ちる。

はっと息を呑んで見る一同――

ラビニア「私じゃないわ！……あんたのせいよ！」

その時、入って来るミンチン――

ラビニアたち、一斉に席につく。

ミンチン、はっと落ちたガラスに気づく。

ミンチン「だ、だれです、ガラスを割ったのは……」

ラビニアがすっと立つ――

ラビニア「セーラです……私が持っていた石版を急に払って、それが

ガラスに当ったんです！」

ミンチン「なんですって？！」

立尽したセーラを見る――

急いで出て来るロッティ。

ロッティ「違うわ、ラビニアが石版でセーラ・ママをぶとうとしたんだもん。それが窓に飛んだんだもん」

ざわめく女生徒たち――

ミンチン「静かに！……静かにするんです！」

女生徒たち、静まる――

ミンチン「セーラ……院長室へ来るんです」

セーラ「は、はい、院長先生……」

ミンチン、出て行く―― 続くセーラ。

ベッキー「お、お嬢様……」

ベッキー、急いで追う

騒然となる一同―― その中で、ニヤリと顔を見合せる

ラビニアたち。

16 同・院長室

ミンチンの前にセーラ。傍にアメリア。

ミンチン「理由は兎も角、この学院の代表生徒であるラビニアさんを怒らせたお前の方が、悪いに決っているんです！」

アメリア「お、お姉様……」

その時、ノックの音——

ミンチン「お入り！」

ドアが開き、ベッキーがオズオズと入る。

ベッキー「あのォ、もとはと云えば、黙って石版をお借りした私が悪いス。ガラス代は私のお給料から……」

セーラ「ベッキー……！」

ミンチン「馬鹿な……一体ガラスが幾らするか判ってるんですか……

お前のひと月分の給料をはたいたって足りやしないんです
よ」
ベッキー「ええッ?」
ミンチン「セーラ、お使いの帰りに、ガラス屋さんを……急ぐんです
よ!」
セーラ「は、はい、院長先生……」

17 同・表

買物篭を抱えたセーラが、使用人階段を上って来る——
女生徒たちの声。
教室の割れた窓に紙が張ってある—— 見たセーラ、通
りへ歩き出す。

18 コベント・ガーデンの一角

掃除道具を持ったピーターと、セーラ。

ピーター「冗、冗談じゃない。それじゃ、まるでお嬢さんのせいじゃないですか」

セーラ「だって、私が石版を払ったのは間違いじゃないし、ラビニアとあれ以上争いたくなかったの」

ピーター「だから人が良すぎるってんですよ……ま、ガラス屋なら、知ってるのがいますから、なんとかさせますけど」

セーラ「有難う、ピーター。お店はどこ？」

ピーター「へへ、それが、ちょいと探すのが……さて、今頃、どの辺かなあ」

セーラ「えっ……」

19 ある裏町

板ガラスを背負った少年の背が行く。

声　「ガラスゥ、ガラス……窓ガラスの修理はありませんかあ……」

×　　　×　　　×

一方から、探しながら来るピーターとセーラ――はっと見る。

ピーター「あ、いましたよ……おおい！」

二人、ぱっとその方へ走る――

×　　　×　　　×

少年が立停って振返る――

少　年「いやあ……ピーターじゃないか」

駆けつけて来るピーターとセーラ。

ピーター「やあ、暫く……商売はどうだい」

少　年「駄目駄目、今日はアブレさ」

ピーター「よおし、いいお客を紹介するぜ」

少　年「へえ、そいつは有難いな……（セーラに）あんたン所かい？」

セーラ「ええ……でも、あまり高いと困るの」

少　年「大丈夫、大丈夫……大きな声じゃ云えないけど、オイラのガラスは、取りこわした家から拾った中ブルだからね、モトはタダなんだよ」

セーラ「ええッ……」

少　年「しいッ……」

笑う少年とピーターたち――

20 ミンチン女学院・院長室

デスクから振り向くミンチン――

ミンチン「なんですって……セーラが、子供のガラス屋さんを……？」

前に、モリーが来ている――

モリー「はい……なんでも、とても安いガラス屋さんを見つけたからとかで」

ミンチン「安い……?」
モリー「はい……」
ミンチン「安ければ結構、すぐに直させなさい。但し、仕事はキチンとさせるんですよ」
モリー「畏まりました、院長先生」

21 同・表の道

心配気に、割れた教室の窓を見上げながら待っているピーター——

22 同・一階廊下

地下の階段から、モリーが、セーラと少年を連れて上って来る。

モリー「いいかい……安いからってインチキな仕事をしたら承知しないからね」

少　年「へへ、大丈夫ですとも、奥さん」

モリー、少年を連れて教室の方へ向う。

心配そうに見送ったセーラ、二階への階段へ急ぐ――

23 同・屋根裏部屋

入って来るセーラ、テーブルに行くと、オカリナや子馬と並んで置いてある小箱をとり、開ける――入っている六ペンス銅貨。

セーラ、その銅貨を取り出すと、じっとみつめる――

24 フラッシュ（18話より）

邸の玄関前で――ドナルドがポケットから六ペンス銅貨をとり出す。
ドナルド「さ、これをあげるよ。なにか買って食べるといいよ」
セーラ「そ、そんな……御親切は嬉しいんですけど、ほんとうによろしいんです」
ドナルド「駄目だよ、受取ってくれなくては……さ」
ドナルド、セーラの手に銅貨を押しつける――

25 ミンチン女学院・屋根裏部屋

じっとその銅貨をみつめていたセーラ、ポケットに入れると、急いで部屋を出て行く――

26 同・一階廊下

27 同・教室の前

階段を降りて来たセーラ、教室の方へ。

セーラ、来る――ふと遊戯室の方を見る。
隣りの遊戯室から、オルガンと手拍子の音が聞えている
――

28 同・遊戯室

アメリアが、オルガンを弾き、女生徒たちが手拍子で囲む中で、ラビニアが得意気にダンスを踊ってみせている
――

29 同・教室の前

セーラ、そっとドアをあける——

30　同・教　室

ドアからのぞくセーラ——

仕事を終えた少年が、ガラスくずを掃除しているのが見える——

セーラ、すべり込むと、急いで近づく。

少年、気づいて振返る——

少　年「やあ、丁度終った所でさあ」

セーラ「有難う……」

セーラ、窓を見上げる——

——割れた箇所は、きれいに元の通りにガラスが入れられている。

セーラ「あのォ、修理代の事なんだけど……」

少　年「なあに……ピーターの紹介と来ちゃあそんなには貰えねえさ」

セーラ「でも……」

少　年「そうさなあ……大まけにサービスして、六ペンスも貰っとくか」

セーラ「まあ……」

少　年「まだ高いかい？」

セーラ「いいえ、丁度よかったわ……じゃ、これ……」

セーラ、ポケットから六ペンス銅貨を出すと渡す――

少　年「へい、毎度ありィ……」

ひょいと銅貨を空中に投げ上げて、受け取める――

31　同・表

使用人階段を、ガラスを背負って上って来る少年――

ピーターが駆け寄る。

ピーター「おい、うまく行ったか」
少年、ニヤリと合図する——

32 同・院長室

ミンチン「なんですって？……修理代はいらないって云って帰ったんですか」
前に、モリーが来ている——
モリー「はい……なんでも、特別にサービスしとくから、ガラス代をメイドさんの給料から引いたりしないでくれ、ですって」
ミンチン「まあ……なんてことを……」

33 同・地下の作業室

アイロン掛けの手をとめたベッキーと、セーラ——

ベッキー「では、ほんとに私のお給料からお払いしなくていいんでございますか」

セーラ「（微笑）ええ、有難う、ベッキー、あなたの気持ちだけで充分よ。さ、仕事を代るわ」

ベッキー「お嬢様……」

明るくアイロン掛けにかかるセーラ――

セーラのＮ「私は、ピーターとベッキーの親切に心から感謝しました……あのラビニアの気持が変ってくれる事を祈りながら」

（第三十三話　終）